

### ●京都商工会議所からの『京の七夕』今年は中止

昨年度末からコロナウイルスの感染防止が叫ばれて屋外や室内での取組がすべて開催できなくなりました。年度末の決算や予算とともに役員体制が整えられなくなど大弱りに落ちっていると耳にしています、里山の会では役員任期は二年目の中間なので少し助かりました。しかし毎年予定していた京の七夕への笹竹の提供は楽しみの大きい取組でした。入金いただくころが最も手持ち金の少なくなる頃なので随分と助かってきました。今年はこれがなくなったので、窮屈な運営になりそうです。

### ●27 日午前中オオムラサキにやさしい贈り物

里山の会の植樹祭を実行 クヌギやドングリを 16 本植えました。27 日は朝から梅雨で雨から激しく強く降りました。計画していた金田さんに午前 9 時ごろ電話すると、ライン連絡で集合することになっていますと返事がありました。きっと中止されるのではないかと心の中で思っていました。が力強く感じました。太田さん金田さん、播川さん、森島さん、深田さん、大村さんの面々が雨の中、植樹作業を行っていただきました。数年すればオオムラサキやその他の昆虫たちに樹液が供給されることになるでしょう。 激しい雨の中、頑張っていたきまして大変ありがとうございました。

### ●里山の会は発足以来、国蝶オオムラサキの観察会を行ってきました

普賢寺地域には確実に生育していることを幼虫の発見を通じて証明してきました。しかし近年成虫の確認はできていなくて昨年一週間をかけてトラップに工夫を凝らし観察を続けましたが、ついに会うことはできませんでした。それで今年こそはと羽化する前に巨大網をエノキにかぶせて、成虫になったオオムラサキを逃がさないようにと対策を取りました。しかし今年も確認できませんでした。幼虫時代にエノキの根元に放しておいたものが確実に繭になっていることを確認できていませんでした。ここにミスがあったのではないかと思います。もう少し丁寧な準備が必要なのかなと気づいています。

### ●27 日朝から木津川のワンドでの生き物調査実施 石田裕子先生と摂南大学生による取組

これまで今年になって 2 月 5 月 6 月と生き物調査を行っていただきました。そのいずれの時もタイリクバラタナゴが確認されています。今回は成魚が捕獲されました、又タナゴの生育に欠かせない二枚貝のイシガイが採取されました。この結果ワンドでは確実にタナゴ類が生息していることの重要な照明がなされたこととなります。素晴らしい成果があがりました。

わたくしたち里山の会は「トヨタ環境活動助成プログラム」の支援を受けてイタセンパラの復活を目指す取組を始めています、そのための課題はかなり難しく大きなものと覚悟していました。その課題の内、私たちでは何とも出さないものと考えていたのが実際に生育できるのかどうかということでした。それがここ数回の調査の結果大変安心できる結果が得られたのです。この調査で最大課題の明るい展望が開けてきたのです。

### ●京都府交響プロジェクト申請 2020 年度分届ける

これまで数回プロジェクトについて説明を行ってきましたが今回初めて大釜様に申請をお願いいたしました。予算規模 300 万円に及ぶ巨大な企画なのでこれはなかなか大変な作業になります。特に 7 項目の事業で各事業の目的や課題等 7 項目を書き上げなければならないので簡単に書き表せるものではありません。2 月から取り組んでいただきましたので約 3 か月に及ぶ力作です。最終的には京都府山城振興局の嘱託職員の寺村さんの強力な援助を得て申請書が出来上がりました。私たち里山の会は、ボランティア団体なので財政は大変少なく思うような事業を展開できません。こうした交付金があれば手持ち金の数倍の力になり活動内容がさらに充実させることが可能になります。こうした交付金がある気と元気を引き起こしていける力になります。

## ●2020 年の「親子で遊ぼう学ぼう魚とり」の募集人数でご意見が伯仲しました

従来通りの規模での提案に対してコロナウイルスの関係で縮小すべきと活発な意見が交錯しました。最終的には 15 組に制限して募集することに落ち着きました、大変縮小した規模に決定となりました。準備する我々にとって都合の良い、無理をしなくても開催できるところに落ち着きました。

## ●中聖牛設置はどの取組の狙いについて竹門先生からいた抱いた説明文を掲載しています。ご理解いただきご協力をお願い致します

### 13 《研究成果の河川整備・管理への反映》

本研究は、伝統的河川工法のモデル事例になるとともに、河床の浸食堆積形態と地形・生息場所形成機能との関係を体系することによって、今後の河川整備や河川管理において、河床の土砂動態を管理する手段として伝統的河川工法の活用を促進することにつながる。とくに、木津川で顕著な河岸浸食が河川管理上の課題となっている 20Kp 流程における聖牛群の設置は、実事業への適用事例に位置付けられ、今後の河川管理に資するものとなる。また、聖牛などの牛類の設計思想は、構造物自体による水理環境管理ではなく土砂の浸食と堆積の制御による地形変化によって間接的に水理環境を管理することを旨としていることから、各地ダム下流河川において問題となっている樹林化や河床低下などの課題に対して、土砂の動態を活性化し河床地形管理を推進する手段として、実務に活用できることが期待される。さらに本研究は、やましろ里山の会のような市民団体が事業主体として河川事業に積極的にかかわる点に大きな特徴があり、本研究の事例は、今後各地河川において参加型河川管理を推進するうえでも役立つと考えられる

### 14 《FS 研究の目標》

FS 研究では、木津川下流に試験施工された竹蛇籠や聖牛(図 1 参照)の効果を検証することで、伝統的河川工法が河道内の物理環境及び生物環境委にもたらす影響に関して基礎的な知見を得ることを目標とする。

中でも聖牛に関しては、新たな応用的方法で 2017 年 12 月に設置されたものである。従来の聖牛の利用法としては、聖牛を横断方向に群体として並べ、それを数列配置することで水の勢いを段階的に弱め、土砂を堆積させ護岸の浸食を防ぐという治水目的での利用が一般的であった。しかし、今回は河道の二極化によって陸域化しつつある砂洲と、冠水頻度が低下しつつあるタマリへの導水という環境改善効果を期待して、流水の方向を二手に分けるように斜め方向に重ねて配置された。このような目的での聖牛の利用は初の試みであり、その配置も過去にない独自の手法である。

本研究では、この聖牛が今年の出水の際に周辺河床地形をどのように改変するのか、生息場構造にどういった変化をもたらすのか、それによって生物群集がどのように変わるのかを定性的かつ定量的に明らかにする。そして聖牛が当該地点で果たした役割を分析し、当初の目的を達するにあたって理にかなっていたのか、その設置場所や配置方法も含めて再度検証する。そうすることで、影響範囲、影響機関、効果を発揮する流量条件を導き出すことを目標とする。

また、竹蛇籠に関しても、2015 年 10 月に流路内の生息構造の多様化を目的として設置され、現在もなお効果を発揮し続けている。こちらも従来にないバーブエのような利用方法であるという特色がある。さらに、2017 年には既往最大クラスの洪水も経験している。その影響を今年もモニタリングすることで、利用方法の確立に向けて経年的変化に関する情報を得ることを目標とする。